

1947年度指定文部省教科書局実験学校における社会科教育の実施過程 —長野師範学校男子部附属小学校による社会科単元指導計画の修正に着目して—

篠崎 正典*

1. はじめに

初期社会科は、『学習指導要領一般編（試案）』で「教育課程はそれぞれの学校でその地域の社会生活に即して教育の目的を吟味し、その地域の児童青年の生活を考へて、これを定めるべきもの¹⁾」と述べられ、学校や地域の特色を生かした自主的なカリキュラム開発が奨励されたことで、多様な実践を生み出したことが知られている。一方で、これまでの初期社会科研究では、『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下、『要領Ⅰ』）が現場の教師たちが理解できずに混乱を招いたことが指摘されつつも、『要領Ⅰ』の具体化の実態は十分に明らかにされることはなかった²⁾。このことは、初期社会科が多様性を生み出したにも関わらず、「這い回る経験主義」と批判されて衰退した理由を問う事なく、自明のもののみならず結果を招いてきたと考えられる。

筆者は、こうした初期社会科研究に対して、これまで十分に注目されることがなかった文部省教科書局（以下、教科書局）による実験学校指定の動きに着目し、第一番目の実験学校である長野師範学校男子部附小学校（以下、長野男子附小）における社会科の実施過程の解明につとめてきた³⁾。その中で、次のことを明らかにした。終戦直後の長野男子附小は、教科書局教材研究課長の青木誠四郎（1894 - 1956）との戦前からの結びつきがあったことから、1946年5月に公民教育、1946年12月に社会科をはじめとする各教科の実践研究に指定された学校であること。長野男子附小では、青木の指導を受けることで、社会科の授業が開始される2ヶ月前の1947年7月の時点で、『社会科指導の研究—指導計画—』

（以下、第1次案）として社会科単元指導計画を発表することができたこと。そして、その社会科単元指導計画は、すべての内容が、『要領Ⅰ』そのものの具体化ではなかったこと、である。

しかしながら、長野男子附小は、第1次案を発表するとすぐに実践化するが、1年後の1948年9月までに一部を修正して『学習指導年次計画総合学習（一、二年）』『学習指導年次計画（三、四年）』『学習指導年次計画（五、六年）』（以下、第2次案）を発表することとなる。このことについて前稿では、第1次案の作成過程とその特色の分析に重点を置いたため、「指導者が青木から『小学校社会科学習指導要領補説』（1948）の編纂者である長坂端午に変更となり、同年9月の研究会までにその一部が修正された⁴⁾」ことを指摘するにとどまっている。しかし、実験学校における社会科の実施過程を明らかにするためには、第1次案の検討に加えて、実際に1次案を実施し、修正した過程とその理由を検討することが必要不可欠である。

以上から、本稿では、教科書局から1947年度の実験学校に指定された長野男子附小で、1947年7月から1948年9月までに行われた社会科単元指導計画修正の実態とその理由を考察し、実験学校における社会科実施過程の一端を明らかにすることを目的とする。そこで本稿では、長野男子附小関係史料を用いて、次の手順で考察する。第一に、1947年7月から1948年9月までの社会科研究の展開を整理し、社会科単元指導計画の修正過程を明らかにする。第二に、社会科単元指導計画修正の実態を、第1次案と第2次案の比較、および1948年9月18、19日の学

*筑波大学大学院人間総合科学研究科

習指導研究会で発表された授業案の分析から解明する。第三に、一、二の研究成果を踏まえ、当時、指導にあたった重松鷹泰と長坂端午の考えとの関連から考察することで、社会科単元指導計画修正の理由を明らかにする。

2. 長野師範学校男子部附属小学校における社会科単元指導計画の修正過程

「1.」で述べたように、長野男子附小では、1947年7月に発表した第1次案の一部を1948年9月10日までに修正し、第2次案を発表した。また、第2次案の発表から8日後の9月18、19日に開催した学習指導研究会⁵⁾では、第2次案に基づく社会科授業を公開している。ここでは、長野男子附小における第1次案発表から第2次案発表までの研究動向を整理し、社会科単元指導計画の修正過程を明らかにしておきたい。

長野男子附小における第1次案発表から第2次案発表までの研究動向について、学校日誌を用いて整理したものが表1である。表1から、次のことが確認できる。

第一に、1947年度は、『要領I』編纂者である重松鷹泰⁶⁾の指導下で、第1次案の実践化に取り組んだことである。長野男子附小の教官たちは、重松から7月15日と17日に「社会科について」の指導、並びに11月6日に長野師範学校女子部附属小学校（以下、長野女子附小）で開催された北陸信越社会科教育研究協議会での講演を聴いている⁷⁾。北陸信越社会科教育研究協議会では、重松の講演「作業単元と社会科の指導」とともに、「社会科の諸問題」という題で開かれたパネルディスカッションにも長野男子附小の教官が参加し、意見を交換している⁸⁾。同時に、12月8日には青木誠四郎⁹⁾から「効果判定」の指導を受け、効果判定の研究にも取り組んでいる。長野男子附小では、社会科が「その使命を果たしていく上に、効果判定が如何に大きな役割を荷っているか」¹⁰⁾として社会科における効果判定の研究を重視し、1948年1月29～31日

の初等教育講習会¹¹⁾で、倉田利久教官が「社会科における効果判定」という題で報告している。こうした研究を踏まえ、長野男子附小は、授業公開や教生の授業研究を行い、第1次案の実践化に取り組んだ。

第二に、1948年度は、第1次案の修正と実践化を行ったことである。これは、1948年度の「社会科事業計画」¹²⁾で「(一)社会科指導計画の構成」と「(二)実際指導の研究」が重視されたことによる。「(一)」では、「昨年度の諸調査及び実際指導の経験に基づいて作業単元の題目主旨主要事項の修正」を行うこと、「児童生活の実態調査」と「地域社会の調査」に基づく修正、そして「実際指導の経験」に基づく修正が計画された。「(二)」では、「指導の研究、指導案体系、実地指導の研究」「指導記録、予備調査、指導結果の反省記録」「効果判定、観点（理解、態度、技能）についての学年基準、内容を明らかにする」ことが計画された。そのため、1948年度は、社会科係会、教生研究授業と社会科に関わる調査が頻繁に行われている。具体的には、4月12日、17日に社会科の係会、5月20日、7月9日に教生研究授業、7月14日には「社会科関心調査」、7月23日には「社会科社会調査」を行っている。また、『小学校社会科学習指導要領補説』（以下、『補説』）発行直前の8月29日には、『補説』の編纂者の長坂端午¹³⁾から「『社会科補説』について」の指導を受け、『補説』の情報を得ている。

第三に、低学年における総合授業の再評価の動きが活発化していることである。長野男子附小では、1941年以来、第一年級で総合授業に取り組み、1942年10月には『国民学校に於ける総合授業』をまとめている¹⁴⁾。この総合授業を1月29～31日の初等教育講習会で再び取りあげ、松下義敏教官（在任1946年3月～1948年3月）が「総合授業について」という題で報告している。そのため、1948年度からは、総合授業を第一年級から「二年度（級）まで拡張して実施」（筆者）¹⁵⁾することになり、4月14、17日には総

表1 長野男子附小における社会科の研究動向

年	月日	研究動向
1947	7月10日	『社会科指導の研究—指導計画—』（第1次案）発行。
	7月14日	CIE 顧問ヘフェナン女史が来校。長野軍政部からケリー、リー女史が同行。
	7月15日	重松鷹泰の講演「社会科について」を受ける。
	7月17日	重松鷹泰より「社会科について」指導を受け、5の3が社会科の研究授業を行う。
	7月18日	長野市上沓両教育会主催にて重松鷹泰の講演（於鍋屋内小学校）が行われる。教官参加。
	9月5日	研究授業。市内第2学年会で、 <u>社会（2-2）</u> の授業公開。
	9月11日	教生研究授業。 <u>社会（6-3）</u> 吉沢芳人。
	9月22日	清水悟郎が主事となる。
	10月21日	倉田教官による教生講話「社会科」。
	11月1日	文部省小宮山事務官来校、懇談する。
	11月4日	文部省坂元彦太郎初等教育課長来校。
	11月5日	教生研究授業。 <u>社会（6-1）</u> 。
	11月6日	神波、橋瓜、伊藤、松本、腰原、深沢、高地教官、松本の長野師範学校女子部で行われた北陸信越地区社会科教育協議会に参加。伊藤と神波教官がパネルディスカッションに参加。重松鷹泰の講演「作業単元と社会科の指導」をきく。
12月8日	青木誠四郎の講演「効果判定について」を受ける。	
1948	1月29 ～31日	初等教育講習会（新教育に於ける個性人間性の意義 新教育と効果判定 国語指導上の主要問題と効果判定 <u>社会科に於ける効果判定</u> 家庭科指導の実際と効果判定 体育科に於けるダンス指導と効果判定 <u>総合授業について</u> 理科指導と効果判定）
	2月9日	青木誠四郎から「カリキュラムについて」指導を受ける。
	4月12日	係会 <u>社会</u>
	4月13日	係会 統計, 教科研究会
	4月14日	係会 文庫, 算数, <u>総合学習</u>
	4月17日	係会 <u>社会</u> , <u>総合学習</u> , 学校自治, 音楽
	4月24日	<u>総合学習打合せ</u>
	5月12日	係会 教科研究会, 五日制委員会
	5月17日	教生研究授業 <u>総合授業（2-3）</u> 清水治男 批評会
	5月20日	教生研究授業 <u>社会（6-3）</u>
	5月25日	職員会で指導計画案各科について検討。
	6月4日	教生自由研究発表会
	6月8日	係会, 教科研究会
	7月6日	授業参観（3-3）のため、ケリー来校
	7月9日	教生研究授業 <u>社会（4-2）</u> 大島克巳
	7月10日	学級PTA（3-3）のため、ケリー来校
	7月14日	<u>社会科関心調査</u>
	7月23日	係会 算数, <u>社会科社会調査</u>
	8月4～7日	信濃教育会主催夏期講習会（於本校講堂）の開催。
	8月10日	高地、深沢、沓掛教官、青木誠四郎宅へ。
	8月28日	森先生来校、教科研究会を主催。
	8月29日	長坂端午来校。教科研究会を開催。午前10時～12時：『 <u>社会科補説</u> 』について 午後1時～2時半：質疑 午後3時：係の先生との研究会 午後6時：晩餐会。
	9月3日	教生自由研究発表会
	9月6日	学習指導研究会のための授業参観。第2時 <u>社会（6-3）</u> , 算数（5-2）, 第3時 国語（3-3）, 国語（6-1）。午後3時半～：研究会, レクリエーション係会。午後4時半～： <u>社会科係会</u> 。
	9月9日	学習指導研究会のための授業参観。第2時： <u>社会（3-1）</u> , 国語（5-1）, 第3時：算数（3-1）, 算数（6-3）。午後：研究会。午後5時半～：職員会。
	9月10日	『学習指導年次計画 <u>総合学習（一, 二年）</u> 』『学習指導年次計画（三, 四年）』『学習指導年次計画（五, 六年）』（第2次案）発行。学習指導研究会のための授業参観, <u>総合学習</u> 。午後：研究会。
9月14日	学習指導研究会のための授業参観。 <u>社会（5-3）</u> , 国語（4-1）, <u>総合（2-3）</u> 。	
9月15日	『 <u>学習指導案集録</u> 』発行。午後4時～： <u>社会科係会</u> （於応接室）。	
9月18,19日	学習指導研究会を開催：講演「 <u>総合教科課程の問題について</u> 」（青木誠四郎）「 <u>言語教育と文学教育</u> 」（西尾実）「 <u>社会科指導要領の補説について</u> 」（長坂端午）「昭和二十四年度学習指導要領について」（和田義信）	
9月21日	午後3時～8時：職員会, 公開授業の反省。	

※下実線は社会科に関わる事項を意味する。

（長野師範学校男子部附属小学校『昭和22年度学校日誌』, 同『昭和23年度学校日誌』, 信州大学教育学部附属長野小学校『開校九十周年学校沿革大要』（1976）, 信州大学教育学部附属長野小学校百年史編集委員会編『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』（1986）より筆者作成）

合授業の係会，5月17日には教生研究授業が持たれ，熱心に研究が行われている。

このような長野男子附小の研究を振り返り，9月18，19日の学習指導研究会で配布された『学習指導案集録』に，高池義則主事は次のようなことばを載せている¹⁶⁾。

「併し文化材を教師の立場で選択し，これを児童に理解させていくという従来の教科課程から，児童の生活経験に即して学習単元を構成し，学習を課題の解決とみる新しい教科課程による方向へと転換してきている今日，方法的体系の上にも再検討を必要とし昨年来研究をつづけて来たのである。この研究は現在においてもまだ完成の域に達していないのであるが，単元学習に即応するということと，日々の実践の上から案を簡素化するという必要から従来の体系に修正を加え，こゝにのせられたような案が作成されたのである。(中略)こゝに学習指導案集録を印刷して配布するのは，今回の研究会に必要であることは勿論であるが，吾々が学習をすゝめて行くのに如何なる準備を必要とし，それにもとづいて如何に学習を展開して行くかについて多少の参考になればとの念願からである。」

すなわち，長野男子附小では，「単元学習に即応する」ことを目指し，1947年7月から1948年9月の間に第1次案の修正とそれに基づく実践が行われたと解釈できるのである。それでは，長野男子附小は，第1次案のどの点を修正して第2次案を作成したのであろうか。次に，第1次案と第2次案のカリキュラム構成の変化と第2次案に基づいて実践された「作業単元」の単元構成を検討することで，社会科単元指導計画修正の実態を明らかにしたい。

3. 社会科単元指導計画修正の実態

(1) 社会科単元指導計画のカリキュラム構成の変化

第1次案から第2次案へのカリキュラム構成の変化を示したものが表2である。しかし，「1.」でも述べたように，低学年の社会科は，総合授業の中で実施されているため分けて考える必要がある。そこで以下では，中高学年と低学年とに分けて，それぞれの変化を分析するという手続きを取りたい。

まず，中高学年については，次の2つの特徴がある。1つ目は，単元の一部が削除されていることである。表2をみると，第三年級の「10. お祭り」，第四年級の「9. お彼岸」「10. 秋祭り」「11. 田子池」，第五年級の「5. 持物調べ」，第六年級の「3. 安全週間」「9. 中学校へ」が削除されている。また，このことを第1次案と第2次案の学習要項の変化(表3)からみると，削除された「作業単元」の中には，他の「作業単元」に内容が統合されているものが存在することが分かる。具体的には，第1次案の第五年級の「6. 持物調べ」「8. 衣食住の変遷」は，第2次案では「6. 衣食住の変遷」という1つの「作業単元」の中に統合されているのである。2つ目は，一部の単元名が変化していることである。表2をみると，第三年級の「9. にぎやかな中央通り」が「9. 長野市の乗り物」に，第四年級の「8. ぶらん堂薬師」が「7. 鉾山物しらべ」に，第五年級の「4. 長野市の交通と通信」「6. 長野市の産業調べ」が「4. 現代の交通と通信」「5. 現代の産業」に，第六年級の「2. 郷土の建設」「5. 工場調べ」「8. 平和日本」が「2. 都市の生活」「4. 工場生産」「7. わが国の現状と将来」へと変化している。この変化した「作業単元」と『補説』の「作業単元の基底」(表4)とを比較してみると，類似する単元名へと変更されたことが分かる。

表2 「作業単元」の変化

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
第一学級	1.一年生(75) 2.お花風(85)	3.背くらべ(45) 4.川あそび(45)	5.梅雨(8) 6.教室をかざる(4)	7.時計作り(3) 8.夏休み(8)	9.八百屋さん(55) 10.秋の遠足(75)	11.お弁当(8) 12.運動会(6)	13.お店ごっこ(6) 14.お人形さん(4)	15.教室のお掃除(6) 16.おかあさんの手伝い(7)	17.かるた会(5) 18.竹スキー(5)	19.勉強のお道具しらべ(5) 20.私のおうち(5)	21.おひなまつり(6) 22.二年生になる(6)	
第二学級	1.一年生 2.つな草 3.お花風 4.解り算満足 5.解り算のお礼	6.お花風 7.背くらべ 8.川あそび 9.粘土あそび 10.石作り	11.鶴のぼり 12.時計作り 13.梅雨 14.教室をかざる 15.夏の川原	16.たなばたまつり 17.朝顔 18.夏休み 19.お花風	19.秋の勉強法 20.やおおさん 21.秋の遠足 22.秋分	23.お月見 24.朝顔しらべ 25.運動会 26.草祭り 27.おたんとう	28.乗物ごっこ 29.遊樂集め 30.お店ごっこ 31.お天気 32.お人形さん	33.教室のお掃除 34.お話し会 35.影踏み遊び 36.お母さんのお仕事	37.かるた会 38.竹スキー	39.節分 40.てんらんかい 41.勉強のお道具しらべ	42.秋のおうち 43.おひなまつり 44.春が来た 45.二年生になる	
第三学級	1.二年生になって(12) 2.春の野山(9)	3.校医の先生(4) 4.学用品調べ(5)	5.虫の虫とり(6) 6.つゆ(6)	7.私の町のお話(7) 8.夏休み(7)	9.おみこし(5) 10.十五夜お月さん(7)	11.お茶の旅(6) 12.運動会(5)	13.配給ごっこ(5) 14.おこたつ(9)	15.ままごと遊び(5) 16.たのしいお正月(11)	17.通信あそび(8)	18.私の勉強べや(6)	19.学芸会(6)	
第四学級	1.一年生になって 2.春 3.都立まき 4.お花風さん	5.学用品しらべ 6.お友だち 7.組のしんぶん 8.のりもの	9.ままごとあそび 10.鳥 11.つゆ 12.解り算作り	13.お百鬼さん 14.水あそび 15.なつやすみ 16.学校ごっこ	17.目のお遊び 18.秋 19.道具のいろいろ 20.お話をあつめ	21.十五夜の月 22.運動会 23.異断面 24.とり入れ	25.町の建物 26.戦時中の仕事 27.お宿 28.誕生会	29.交番 30.お客さま 31.お正月の遊び	32.新年 33.郵便ごっこ 34.雪と氷	35.消防士 36.馬場会 37.私の勉強 38.おうちの入り	39.近所 40.学芸会 41.二年生	
第五学級	1.新しい学年(6) 2.見晴しのながめ(45) 3.新しい学年(6) 4.見晴しのながめ(45)	3.赤十字病院(10) 4.薯山(8)	5.新花川とその利用(18) 6.養料の島(10)	7.夏休みの計画(8.5) 8.夏休みの計画(8.5)	8.ぶらり堂業種(8) 9.お徳屋(14)	10.秋祭り(8) 11.田子池(10)	12.市役所(15) 13.冬じたく(6.5)	14.長野県と私たちの生活(8.5) 15.お正月の行事(8)	16.楽しい食事(11) 15.クリスマスとお正月(7)	17.電気とガス(7) 16.車外とガス(7)	18.私達の家(8) 19.発表会(3)	17.研究発表会(5)
第六学級	1.私の勉強法(20) 2.私の勉強法(20)	2.私の健康法(30) 2.私の健康法(30)	3.安全通風(24) 3.安全通風(24)	3.よいお友だち(28) 3.よいお友だち(28)	4.長野市の交通と通風(24) 4.現代の交通と通風(24)	5.長野市の交通と通風(24) 5.現代の交通と通風(24)	6.長野市の産業調べ(24) 6.衣食住の変遷(32)	7.衣食住の変遷(22) 7.衣食住の変遷(32)	8.明るい家庭(10) 7.明るい家庭(10)	9.長野市の役所(22) 8.長野市の役所(22)	10.最高学年へ(10) 9.最高学年へ(10)	
第七学級	1.学校新聞(18) 2.都道の生活(34)	2.安全通風(24) 2.都道の生活(34)	3.安全通風(24) 3.生活設計(24)	4.生活設計(18) 3.よいお友だち(28)	5.工場調べ(24) 4.工場生産(35)	6.かっぱの産物調べ(18) 5.かっぱの産物調べ(18)	7.明るい家庭(33) 6.明るい家庭(30)	8.明るい家庭(36) 7.我が国の現状と展望(32)	8.平和日本(36) 7.我が国の現状と展望(32)	9.中学校へ(12)		

※1 網掛け部分は、第2次案を意味し、()内の数字は、実施時間数を意味する。

※2 下実線は、名称が変化した単元、下波線は、削除された単元を意味する。

(長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』(1947) 9-98頁, 同『学習指導年次計画総合学習(一,二年)』(1948) 2-74頁, 同『学習指導年次計画(三,四年)』(1948) 21-47頁, 同『学習指導年次計画(五,六年)』(1948) 13-30頁より筆者作成)

表3 「作業単元」における学習要項の変化

『社会科指導の研究』(1947)		『学習指導年次計画』(1948)	
単元名	学習要項	単元名	学習要項
第一年級 「8.八百屋さん」	<ol style="list-style-type: none"> (1) ままごと遊びをする (2) 八百屋さんごっこをする (3) 八百屋さんへ見に行く (4) りんご園や野菜畑を見に行く (5) 学級園の作物の世話をする 	第一年級 「20.やおやさん」	<ol style="list-style-type: none"> (1) この頃の学校や家庭の食物 (2) 八百屋見学 (3) 八百やさんごっこ (4) 果物や野菜のねだんをしらべる (5) 果物の絵集め (6) 果物、野菜の手入の過程をしらべる (7) 食物をつくる母親の仕事 (8) 野菜や果物が食物として役立っていること (9) 野菜や果物をつくっているお百姓さんの仕事 (10) 食物を清潔に保つ方法や取扱 (11) 学級園や畑の作物の手入 (12) こくごのほん、文庫室の本をよむ (13) かぼちゃ運びによって基数たす基数の暗算 (14) 野菜や果物の写生 (15) 粘土あそび「果物づくり」眼と手の感覚 (16) 唱歌「りんごと子供」 (17) 器楽ミハルスダンプリン、木琴による合奏
第三年級 「9.にぎやかな中央通り」	<ol style="list-style-type: none"> (1) 長野市内の交通運搬について調べる (2) お店しらべ (3) 長野駅見学 (4) 各地の交通、運輸について調べる (5) 環境と交通との関係を調べる (春以来の経験をもとにして) 	第三年級 「9.長野市の乗り物」	<ol style="list-style-type: none"> (1) 長野市内の交通機関について調べる (2) 長野駅の見学 (3) 長野電鉄、川中島自動車の見学 (4) 市内交通機関のはたらきを示すように画に書いたり、地図を作ったりする (5) 中央通りの交通調べ、お店調べをする (6) 商業と交通の関係を考える (7) 各地の交通運輸の方法を調べる (8) 展覧会をする (9) 交通道德を守るよう表を作る
第五年級 「6.持物調べ」	<ol style="list-style-type: none"> (1) 持物調べ (2) 持物の性能、機能調べ (3) 持物の持ち方扱い方 (4) 持物と生活 (5) 資源の保全の研究 (6) 学用品変遷の研究 (7) 学用品の生産輸送 	第五年級 「6.衣食住の変遷」	<ol style="list-style-type: none"> (1) 持物調べ (2) 昔の人のくらし方しらべ (3) 衣食住と郷土生活の研究 (4) 衣食住の資源の研究 (5) 世界の風俗調べ (6) 発明発見による生活の向上

(長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』(1947) 9-98 頁, 同『学習指導年次計画 総合学習(一,二年)』(1948) 2-74 頁, 同『学習指導年次計画(三,四年)』(1948) 21-47 頁, 同『学習指導年次計画(五,六年)』(1948) 13-30 頁より筆者作成)

表4 作業単元の基底

学 年	作業単元の主題
第1学年	家庭, 学校, 友だち, 健康な生活
第2学年	近所の生活, 農家, 商店, 郵便集配人, 公共のために働く人々
第3学年	地域社会の生活, 動植物と人間の生活, 郷土の交通・運輸
第4学年	地域社会の現在と過去, 昔の交通・通信, 資源の保護・利用, 昔の商工業
第5学年	衣食住の発達, 現代の交通・通信・運輸, 保健と厚生慰安, 政治
第6学年	工業と動力, 新聞とラジオ, 交易, わが国と関係の深い国々, 現在の社会とその将来

(文部省『小学校社会科学習指導要領補説』(1948) 28,29 頁より筆者作成)

次に、低学年については、単元数が大幅に増加しているという特徴がみられる。これは、先にも述べたように、総合授業の実施に伴い、第一・二年級では、すべての教科の枠を取払い、総合授業の中で社会科の学習が行われるようになったためである¹⁷⁾。このことは、第1次案と第2次案の「作業単元」の学習要項の変化(表3)に着目すると、さらに明確になる。表3に示した第一年級の「20. やおやさん」をみると、「(12) こくごのほん、文庫室の本をよむ」や「(16) 唱歌『りんごと子供』」という国語科や音楽科をはじめとする他教科の学習活動が追加されているのが分かる。すなわち、第一・二年級の「作業単元」では、各教科の多様な活動が盛り込まれる中で社会科の学習が行われているのである。

(2) 社会科「作業単元」の単元構成

それでは、第2次案に基づいて実践された「作業単元」はどのような単元構成となっていたのであろうか。長野男子附小は、1948年9月18、19日に開催された学習指導研究会で、第2次案に基づく授業を公開した。研究会で公開された社会科に関わる授業は、「やおやさんごっこ」(第一年級)「遊具のいろいろ」(第二年級)「長野市の乗り物」(第三年級)「長野市付近の鉱産物」(第四年級)「現代の通信」(第五年級)「工場生産」(第六年級)である。先述のように、低学年は総合授業の中で社会科が扱われた。そこで、本稿では社会科の実践が行われた中高学年に注目し、「長野市の乗り物」(第三年級)を取りあげて『補説』に示された単元構成と比較することで、第2次案における単元構成の特色を明らかにする。

「長野市の乗り物」は、第三年級の9月中に計20時間をかけて行われた「作業単元」である(表2)。まず、この「作業単元」では、次のような単元の目標を掲げている¹⁸⁾。

「此の作業単元は長野駅長野電鉄等市内の交通施設や市内の交通状態を見、それ等と関連して中央通りのお店を調べ、郷土の生活はど

のように他の土地との依存関係によって成り立っているかということや、郷土と他の土地とを結ぶものとしての交通運輸の機能の必要性を知らせ、その社会的自然的条件を理解させようとするものである。」

次に、この「作業単元」は、「1 展開系列及所要時間」「2 準備」「3 連絡(イ他単元との連絡口他教科との連絡)」「4 学習活動の展開」から構成され、「4 学習活動の展開」に「作業単元」の展開が示されている。「4 学習活動の展開」を示すと、表5になる。この「作業単元」は、「端緒」「理解」「発表」から展開される。「端緒」では、「汽車ごっこ」を行い、「理解」では、「長野駅長野電鉄見学」「汽車ごっこ」「川中島自動車」「お店しらべ」「交通しらべ」という現地での調査活動を行う。そして、「発表」では、「展覧会」「交通道徳を守るため表を作る」という活動を行っている。したがって、「端緒」で「ごっこ遊び」により、子どもたちの興味関心を引き出し、「理解」で現地調査を行い、子どもの理解を喚起し、最後の「発表」で今後の活動につながるまとめをするのである。

では、この「作業単元」は、『補説』に示された「作業単元」の展開方法から、どの程度の影響を受けているだろうか。先に結論を述べると、十分な影響を受けていないというのが事実である。なぜなら、『補説』における「作業単元」の展開方法は、「一、単元の効用」「二、単元の導入」「三、学習活動の発展」から構成されているためである¹⁹⁾。「一、」は「(一) 民主的な社会生活に対する効用」「(二) 児童に対する効用」からなる。「二、」は「(1) 環境の設定」「(2) 環境への働きかけ」「(3) 環境への反応」「学習活動の発展」からなる。したがって、「端緒」「理解」「発表」から構成される第2次案と『補説』に示された「作業単元」の展開は異なっていると言える。なお、第1次案では、「(1) 問題の把握」「(2) 理解」「(3) 実践」という3つから「作業単元」の展開を構成することが示されている²⁰⁾。

表5「長野市の乗り物」(第三年級)の展開

過程	学習事項	様式	学習活動	教師の指導	備考
端緒	汽車ごっこ	話し(全) 話し(全)	○飾ってあるものを見て自由に話し合う ○やり方について相談する ・どんなやり方にするか ・どんな道具を使うか	環境の設定所要の掲示や貼り出しをし、汽車ごっこの道具を並べておく ○適当な時、「汽車ごっこをしよう」と口を切るグループ毎に相談に乗ってやり、準備のある物は渡し、足りない分は作らせる	ポスター、ビラ、構内略図、長野駅日・月別乗降客数、駅や汽車の写真、日本地図、模型の汽車、板片、笛、厚紙 効果判定(態度、技能)
		作業(グループ)	○グループで役割を考えて準備にかかる 売場:切符の用意、こしらえ等 改札:ハサミ、改札口のこしらえ等 汽車:どんな汽車にするか、路線等 乗り場:ホーム、駅長、車掌、売り子等 お客さん:お金、どこへ行くか相談 出口口:こしらえ等間表		
		作業(全体) 話し(全)	○汽車ごっこをやる ○汽車ごっこについて話し合って改善する点を話し合う ・連絡が悪い ・道具が少ない一家にあるものを持って来たり作ったりする ・もっと本当らしく一設備を加える	貨物のこと、駅の付近のことを付け加えたらいいことを話す	
理解	長野駅 長野電鉄見学	計画(全体) 話し(全) 話し(グループ) 全体	○駅見学の計画をたてる ・駅構内図を見て話し合う ・班毎に見て来たいこと聞いて来たいことをまとめる ・話し合ってわかることを整理し問題をきめ、手帳に書いて置く ・質問のことはばを言って見る ・依頼状を書いて駅へ出す、話をしてもらいたいことを同封する	○相手もいそがしいこと問題をはっきりして行く事が大切なことを話す 駅のこと:施設、いろいろの施設、乗り降りの様子、汽車のついた時つかない時、係りの仕事、貨物係りの話、貨物の積卸 汽車のこと:種類一用途、どこへ行き、どこから 駅付近:駅前らしい様子、末広町の店の種類 長野電鉄	構内図 効果測定(態度、技能) 効果測定(態度) 効果測定(理解、技能)
		話し(全)	○見学の注意を話し合って私達のきまりを作る		
		見学(全) グループ	○駅見学を実施する・計画に従って案内を受けて見学する・要点を記録したり、スケッチする ○見学して来たことをまとめて話し合う ○見学の態度を私達のきまりに照して考え今後の注意をきめる ○お礼状を出す ○見学して来てわかった事を取り入れるように準備を進める		
理解	汽車ごっこ	作業(全体)	○それを取り入れてもう一度汽車ごっこをやってみる ・来た貨物やついた人達の行先 ・出す貨物や行く人達の来た所を知る必要が起る ・市内の他の乗り物も入れてみたい		
		計画(全) グループ (全体)	○川中島自動車、お店調べ、交通調べを計画する ・調べて来る問題調べ方を話し合ってみる ・前の計画を考えて注意することを話し合い私達の決まりをつける ・きまった事をノートにとり、質問の練習をする ・依頼状を出す	前にした事を思い出させ、三つの仕事なので手落ちなく考えさせる ○川中島自動車発着所乗る人、路線、話をきく ○お店調べ どんなお店が多いか店の品物はどこから来るか ○交通網 車の数、種類、つんでいる物、危険に注意させる	三の二 効果測定(能力)
		見学(全体) 調査(グループ) 調査(グループ) 作業(グループ)	○川中島自動車を見学し、話を聞く ○交通調べを実施し、荷物も見る ○お店調べを実施し、品物の産地を聞く ○見学したことの評価をする、お礼状発送		どおじないで勇気を出すようはげます 調査の場所は教師と一緒にやって考えてやる 各自の分担をきめてまかされた仕事をしっかりやる様注意する
発表	交通調べ	発表(全体) 作業(全体)	○見学したこと、調査したことを班毎にまとめて発表する ・澤山の品物が日本の各地から来ることを知るため品物の絵を日本地図の上に置いてみる ・生活に必要なものを多く他の土地から受けていることを考える	日本地図は教師が作製しておく、必要地名も書いておく 商業の役割と交通運輸の関係の理解を確める 統計作製について班別に指導する	日本交通図 効果判定(技能) 表現力 効果判定(理解、技能)
		作業(グループ)	・商業の意義のわかる様な表現をする ・中央通りの様子を共同製作で絵に書いてみる ・交通調べの統計をまとめて話し合う ・物貨入手の経路を示す表を作る		
		話し(全体)	○どんな交通運輸の方法があるか考える ○本や写真を集めて調べる ○土地にあった交通運輸の方法があることを発見する ○調べた物を展覧し、わかった事を発表する会を計画する ○出品する物をきめ、やる事をきめて準備する	教師準備のものやたろうの中にある事柄など話す	地理風俗大系学級文庫、写真 効果判定(技能)
発表	展覧会	計画(全体)	○調べた物を展覧し、わかった事を発表する会を計画する ○出品する物をきめ、やる事をきめて準備する	展覧された物を見て理解を確実にさせる様注意する	効果判定(能力、態度)
		招待(全体)	○飾付けを皆でする ○展覧会を実施する	招待のための計画をよくねる(玄関から教室までを駅のつもりにして)乗車の注意	効果判定(態度、能力) 効果判定(理解、態度)
		交通道徳を守るため表を作る	○調べて来たことを考えて、自分達も注意することを書いてみる ○そのために表を作ってつけてみる	乗車の注意交通道徳等について考える、道路愛護	効果判定(理解、態度)

(長野師範学校男子部附属小学校『学習指導案集録』(1948)社17-23頁より筆者作成)

「(1)」は「児童の学習活動の端緒が与えられる段階」, 「(2)」は「児童は問題を追求し, 理解しながら, 更に社会生活に必要な技術生活態度を身につけていく」段階, 「(3)」は「今後の生活において本单元によって身についた一切を発展」させる段階, として位置づけられている。ゆえに, 第2次案の「端緒」「理解」「発表」という单元構成は, 『補説』よりも第1次案で示されたものを参考にして, 具体化されたと解釈できるのである。

以上を踏まえると, 社会科单元指導計画は, ①中高学年における单元が削除されたこと, ②中高学年の单元の名称が『補説』の影響を受けて変更されたこと, ③低学年の社会科が総合授業の中で展開されたこと, の3点の修正がなされたとまとめることができる。では, いかなる理由から, このような修正が行われたのであろうか。「2.」でも述べたように, 長野男子附小の社会科单元指導計画修正には, やはり, 重松と長坂の指導が影響を与えていると考えられる。しかしながら, 長野男子附小の学校日誌からは, 彼らの指導題目のみの確認が限界である。そこで本稿では, 重松と長坂が同時期に発表した論考から彼らの考えを明らかにし, 「2.」「3.」の考察で明らかにした社会科单元指導計画の修正内容との比較をすることで, 長野男子附小の社会科单元指導計画修正の理由を明らかにしたい。

4. 社会科单元指導計画修正の背景

(1) 重松鷹泰の指導内容に基づく「作業单元」の削除

第2次案の修正内容の1つ目は, 中高学年における「作業单元」の削除である。具体的には, 第三年級の「10. お祭り」, 第四年級の「9. お彼岸」「10. 秋祭り」, 第五年級の「5. 持物調べ」, 第六年級の「3. 安全週間」「9. 中学校へ」が削除されていた。

これには, 重松による指導が影響を与えたと考えられる。なぜなら, 当時の重松の社会科観,

とりわけ, 「2.」で触れた北陸信越地区社会科教育研究協議会での講演「作業单元と社会科の指導」の内容と, 削除された「作業单元」の内容が重なるためである。

重松は, 『要領 I』の編纂²¹⁾が落ち着く1947年4月から, 文部省を退いて奈良女子高等師範学校附属小学校の主事となる12月27日までに多くの論考を発表している²²⁾。その中で, 重松が重視したのが, 社会科指導のために必要となる「作業单元」の設定方法である。それは, 次の理由からである。「作業单元」は, 民間情報教育局 (Civil Information and Education Section) の事務官ヘレン・ヘファナン (Helen Heffernan) の指示で, 社会科の「学習指導計画に予定された一連の学習活動」²³⁾を組織するための見本として『要領 I』の巻末に添付された。しかし, 『要領 I』における「作業单元」の説明が不十分であったために, 現場で混乱を招くこととなったためである²⁴⁾。

そこで, 北陸信越地区社会科教育研究協議会で重松は, 「作業单元」の意味と「作業单元」の設定方法について言及した。「作業单元」の意味については, 「学習活動は即ち子供達に与えられる経験と考えられます。経験と言えば子供達の活動でもあり, 知識でもあります。従って或期間に於て子供達に予想される所の経験が作業单元であります」²⁵⁾と述べた。その上で, よい「作業单元」の設定規準として, 次の2つを指摘した。それは, 「子供達に社会生活の統一ある見方を与えるようなもの」であることと, 「社会生活に必要なさまざまな知識が豊富に与え」るものであること, であった。前者は, 「社会生活の断片を子供達に経験させ, 色々雑多の事を教える」のではなく, 「指導要領の中にある問題, 或いはその根底にある社会科の目標」を踏まえて指導することである。そこで重松は, 「宗教的取扱い或はリクリエーションとしての取扱いに過ぎず, 目標や問題の一つか二つにふれるだけで, 目標や問題が全面的に取扱われにくい」²⁶⁾実例として

「お彼岸」の単元名をあげている。後者は、子供達に「直接経験」を与えながら、様々な知識を獲得させていくことである。

以上を踏まえると、中高学年に見られた「作業単元」の削除は、重松の「作業単元」に対する考えの影響を受けて、実施されたと考えることができる。

(2) 長坂端午の指導による『補説』の影響

続いて、第2次案の修正内容の2つ目は、中高学年の「作業単元」の一部が、『補説』の「作業単元の基底」に示された単元名に類似するものへと変化したことである。また、逆に「作業単元」の展開方法への『補説』の影響は十分に確認できなかった。

これは、長坂が1948年8月29日に長野男子附小で行った指導が、『補説』の「作業単元」の構成方法のみに終止していたためであると考えられる。なぜなら、長坂は、同時期に発表した論考²⁷⁾で、当時が『補説』に関するすべての情報を公開することが不可能な時期であったことを次のように述べているためである²⁸⁾。

「小学校社会科学習指導要領の補説は遠からず教師諸彦の手許にとどく事と思うが、まだその内容を全面的に公開したり解説したりする時期には至っていない。」

そのため、長坂は、上記の論考で触れている『補説』のスコープとシーケンスと「作業単元の基底」を中心に伝えたと考えられる。前者は、単元を配列する際の学習内容の横の広がりとは、各学年の主要経験領域である。学習内容の横の広がりとは、7つの社会機能「生命、財産及び資源の保護保全」「生産、分配、消費」「交通、通信、運輸、交際」「厚生慰安」「美的並に宗教的欲求の表現」「教育」「政治」である²⁹⁾。各学年の主要経験領域とは、「第一学年 家庭・学校および近所の生活」「第二学年 家庭・学校および近所の生活」「第三学年 地域社会の生活（大昔の生活と比較して）」「第四学年 私たちの生活と現在

と過去」「第五学年 現代日本の生活」「第六学年 日本の生活と諸外国」である³⁰⁾。なお、長坂は、この主要経験領域を「長野師範男子部附属小学校の児童語彙の調査、就中外国に関係した固有名詞の語彙の調査および、社会生活における相互依存の理解の度合の調査はよい参考になった」³¹⁾と述べ、長野男子附小の実験を踏まえて作成したことを指摘している。後者の「作業単元の基底」とは、前掲の表4で示したものである。長坂は、この「作業単元の基底」について、「学習指導要領と個々の教師の作る具体的な作業単元との中間に位して、個々の教師に単元構成の便利な手がかりを提供するもの」³²⁾とする。

以上を踏まえると、長坂が長野男子附小で伝えた『補説』の内容は、スコープとシーケンスと「作業単元の基底」が主であったと言えるのである。したがって、第2次案では、カリキュラム構成のみに『補説』の影響が見られたのである。

(3) 低学年における総合授業実施の影響

最後に、第2次案の修正内容の3つ目は、低学年における総合授業の実施に伴い、低学年の社会科が、総合授業の中で行われることになったことである。「2.」で述べたように、長野男子附小では、1948年1月29～31日の初等教育講習会での松下教官の講演「総合授業について」以来、総合授業を再評価し、1948年度から第一・二年級で行うこととなった。

しかしながら、総合授業の中で社会科を実施することについて、重松の影響はみられない。なぜなら、当時、重松は低学年の社会科を総合授業の中で行うことを認めていなかったためである。その事実は、先述の北陸信越地区社会科教育研究協議会のパネルディスカッションの際に重松が述べた、以下の意見から伺うことができる³³⁾。

「社会科の中に各教科を総合させてやってみて行く、即ち総合教育の単元として、社会科を考えたというご意見もありましたが、これも

一つの意見でありまして今の所全面的には賛成出来ないであります。」

それにも関わらず、長野男子附小が総合授業の中で社会科を実施したのは、教官たちが「児童の自発活動が旺盛に発揮され何処迄も個性が自由に伸張されて行く所」³⁴⁾を重視して低学年の学習指導に取り組もうとする考えを持っていたためである。そのため、長野男子附小では、1941年度から実施してきた総合授業の年次計画を「地域の特性一郷土全般の実地や児童の生活調査一学校行事、児童の実態に即した如くに項目を選択し、過去七年間の記録一に基いて反省され修正を加えられた先人の苦心の結晶である一を基盤として修正を加えて」³⁵⁾実施したのである。その際、松下教官が「教科から考えるならば総合科である社会科が生活の基本的習慣を形成する立場から中核となって生活指導が果され、他の教科はこの基盤に含まれる基礎的訓練をなす教科と見做」³⁶⁾すと述べるように、社会科を中心に低学年の総合授業を構成することを主張したのである。

以上のように、低学年における総合授業の中での社会科実施は、長野男子附小による長年の経験³⁷⁾に基づいて行われたと解釈できるのである。

5. 結語

本稿では、実験学校による社会科実施過程の一端を明らかにするために、長野男子附小による1947年7月から1948年9月までに行われた社会科学習指導計画修正の実態とその理由を検討してきた。本稿の考察により明らかになったことは、以下の点である。

第一に、1947年7月から1948年9月までの社会科研究は、第1次案の指導者であった青木ではなく、『要領Ⅰ』の編纂者である重松と『補説』の編纂者である長坂の指導下で行われた。その結果、第1次案の発表から第2次案の発表までの長野男子附小では、社会科の研究と総合授業の研究が重視されるようになった。第二に、社会科指導計画の修正内容は、①中高学年におけ

る単元が削除されたこと、②中高学年の単元の名称が『補説』の影響を受けて変更されたこと、③低学年の社会科が総合授業の中で展開されたこと、であった。しかしながら、「作業単元」の展開には、『補説』の影響が十分に見られなかった。第三に、第1次案の①～③の点が修正された背景には、次のことが関係していた。①は、重松による社会科「作業単元」の設定方法、②は長坂による『補説』に示されたスコープとシーケンスと「作業単元の基底」の紹介、の影響によるものであった。しかし、③は、重松や長坂の指導内容による影響よりも、当校で、戦前から取り組んできた総合授業の研究蓄積に基づいて修正されたものであった。

以上から、実験学校における社会科の実施過程の特色は、次のようにまとめることができる。第1に、教科書局が指定した実験学校において、本格的に『要領Ⅰ』編纂者の指導を受けての社会科実施が可能となったのは、1947年7月中旬以降であったことである。第2に、『要領Ⅰ』や『補説』の編纂者の指導を受けつつも、実験学校における戦前からの研究成果もいかながら行われた。長野男附小では、低学年の社会科が、1941年から実施している総合授業の経験を踏まえたものとなっていた。したがって、実験学校における社会科実践は、1947年9月から全国で社会科の授業開始の少し前の時期に、本格的に『要領Ⅰ』に基づく社会科が実施されたと同時に、その後、『補説』の部分的な影響と、戦前からの経験を生かしながら、独自の展開をみせたと解釈できる。

長野男子附小以外の1947年度指定実験学校でも、同時期になると第1次案が修正され、第2次案が作成されている。長野男子附小との比較検討を通して、実験学校における社会科単元指導計画修正の全体像を捉えることが次なる課題である。

註

- 1) 文部省『学習指導要領一般編（試案）』（1947）12頁。
- 2) 代表的な研究に小原氏の研究がある。ここでは、『要領Ⅰ』に準拠する実践と一言でまとめられ、具体的な過程が検討されていない。（小原友行『初期社会科授業論の展開』（風間書房，1998））

- 3) 拙稿「文部省教科書局実験学校における社会科単元指導計画の作成—青木誠四郎の社会科教育論を手がかりに—」（日本社会科教育学会『社会科教育研究』第112号，2011）38-50頁。
- 4) 拙稿，前掲3）40頁。
- 5) 学習指導研究会の日程は，以下の通りである。

1日目（9月18日）	2日目（9月19日）
8:00～9:00 受付	8:00～9:00 受付
9:00～9:40 学習指導（1,2年級はすべて総合，3-1:社会，3-2:国語，4-1:国語，5-1:社会，5-2:算数，5-3:家庭，6-3:算数）	9:00～10:30 講演 西尾実（東京女子大学教授）「言語教育と文学教育」
10:00～10:45 学習指導（1,2年級はすべて総合，3-1:算数，3-2:図工，3-3:国語，4-1:音楽，4-2:社会，4-3:算数，5-1・5-2の女:体育，5-3:算数，6-1:国語，6-2:社会，6-3:理科）	
11:00～11:45 学習指導（3-2:社会，3-3:算数，4-1:社会，4-2:算数，4-3:国語，5-1:国語，5-2:社会，5-3:国語，6-1:算数，6-2:国語，6-3:社会）	10:40～12:10 講演 長坂端午（文部省事務官）「社会科指導要領の補説について」
11:45～12:25 昼食	
12:15～12:25 リクリエーション（音楽，ダンス）	12:10～12:40 昼食
12:40～14:40 分科会（研究討議）	12:40～13:00 リクリエーション（音楽，ダンス）
14:50～16:20 講演 青木誠四郎（文部省教材研究課長）「総合教科課程の問題について」	13:00～15:00 講演 和田義信（文部省事務官）「昭和二十四年度学習指導要領について」

なお，1日目の分科会の内容は，以下の通りである。

科目	指導講師	当校係	会場	中心問題
国語	西尾実	吉川，宮下，上條，小松	信濃教育会講堂	児童の言語生活の実態・児童の国語力・文章研究の意義・読み方の学習指導目的と方法・作文に於ける文の形態と成績品処理話し聞く生活の指導方法・単元及年次計画・効果判定
社会	長坂端午	橋爪，松本，伊藤，倉田，腰原，竹村	本校講堂	単元の構成とその指導
算数	和田義信	高池，村田，白鳥，山本，大日方	体操場	単元の構成とその指導 一，単元学習指導案の作り方教え方 二，過渡的な取扱をどうするか
総合学習	青木誠四郎	清水，深澤，黒澤，中原，袖山	附属講堂	総合学習の必要・単元構成について

（長野師範学校男子部附属小学校『学習指導案集録』（1948）1,2頁より筆者作成。）

- 6) 1908年東京に生まれる。1932年に東京文理科大学を卒業し、師範学校の教育や東京都の教育行政にたずさわり、城戸幡太郎とともに教育科学研究会に参加。太平洋戦争末期には一兵卒として中国で敗戦をむかえる。復員後、文部省教科書局調査課に入省し、青木誠四郎の下で働くとともに、『要領Ⅰ』の作成にあたる。1947年12月に奈良女子高等師範学校附属小学校主事、1952年に名古屋大学教育学部教授となる。1995年没。
- 7) 『信州大学教育学部附属松本小学校60年史』(1969)には、「北陸信越地区師範附属学校社会科研究会当校に開催参加者約800名2日間」(93頁)という記述がある。長野男子附小からは、神波、橋瓜、伊藤、松本、腰原、深沢、高地教官が参加している。(長野師範学校男子部附属小学校『昭和22年度 学校日誌』)
- 8) パネルディスカッションでは、「一、討議議題の決定」「二、作業単元の設定について」「三、討議学習について」「四、目標の設定について」という議題が設けられた。中でも、「二、作業単元の設定について」に重点が置かれ、「1、旧単元と新単元」「2、旧単元の行きづまり」「3、児童生活の反省」「4、実態調査」「5、作業単元の数」「6、大単元と小単元」について話し合われた。なお、パネラーは以下の通りである。重松鷹泰(文部事務官：司会)、上條為人(長野師範学校女子部附属小学校)、斎藤定雄(同)、伊藤朝雄(長野師範学校男子部附属小学校)、神波利夫(同)、泉屋清(石川師範学校女子部附属小学校)、林繁樹(福井師範学校男子部附属小学校)、岡田吉兵衛(石川師範学校男子部附属中学校)、牧田利平(新潟第二師範学校附属小学校)、宮正安(新潟第一師範学校女子部附属小学校)、小西信三(富山師範学校男子部附属小学校)。(長野師範学校女子部附属小学校『社会科の研究』(1948)15、16頁。)
- 9) 青木の経歴と長野男子附小との関わりについては、拙稿、前掲3)を参照。
- 10) 長野師範学校男子部附属小学校「社会科効果判定について」(『教材研究』第3巻第2号、1948)14頁。
- 11) 初等教育研究協議会は、各教科の研究発表のために大正四年に開設された。昭和22年度の大会では、1000人以上の申し込みがあったとされる。(信州大学教育学部附属長野小学校百年史編集委員会編『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』(1986)744-751頁。)
- 12) 長野師範学校男子部附属小学校『平成23年度学校要覧』(1948)7頁。
- 13) 1907年長野県に生まれる。1918年に東京文理科大学を卒業後、山梨県女子師範学校教諭、和歌山県師範学校教諭、静岡県師範学校教諭・教授を経て、1947年11月28日から文部省教科書局教材研究課に勤務し、重松の後任として『補説』の作成にあたる。1952年に信濃教育会教育研究所専任所員、1953年に東京教育大学教授となる。1977年没。
- 14) 『国民学校に於ける総合授業』は、青木による構想、材料(児童研究の成果)の整理についての指導を受けてまとめられた。「私タチノ学校」「天長節」「丹波島川原」「七夕」「お天気」「善光寺」「お客様」の生活題目を構想し、実践した。
- 15) 村田好道「総合学習の指導計画」(『教材研究』第3巻第4号、1948)38頁。
- 16) 長野師範学校男子部附属小学校、前掲5)3頁。
- 17) 『昭和二十三年度学校要覧』によれば、第一・二年級はすべての教科を総合授業、第三～六年級は、国語、社会、算数、理科、家庭科、音楽科、図画工作科、体育科が設置されている。したがって、第一・二年級は

- 総合授業の中で、社会科が展開された。
- 18) 長野師範学校男子部附属小学校, 前掲 5) 社 1 頁。
 - 19) 文部省『小学校社会科学習指導要領補説』(1948) 38-43 頁。
 - 20) 長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究—指導計画—』(1947) 101-102 頁。
 - 21) 『要領 I』の作成過程は, 片上宗二『日本社会科成立史研究』(風間書房, 1993), 木村博一『日本社会科の成立理念とカリキュラム構造』(風間書房, 2006) が詳しい。
 - 22) この時期の重松の主な論考には, 次のものがある。「入学当初における社会科の指導について」(『低学年教育技術』第 1 巻第 1 号), 「社会科指導の構想」(『教育技術』第 2 巻第 3 号), 「社会科の研究課題」(『社会科教育』創刊号), 「社会科のあり方」(『生活教育研究』第 1 巻), 「社会科の学習指導」(『民主教育』第 2 巻第 5 号), 「社会科と教育環境」(『教育社会』2 巻 5 号), 「社会科指導の基礎」(『社会科教育』第 2 号), 「社会科指導の基礎 (2)」(『社会科教育』第 3 号), 「作業単元の立て方について」(『社会科教育』第 4 号), 「社会科の指導」(『教育技術』第 2 巻第 6 号), 「社会科への発足」(『公民教育』第 1 巻第 4 号), 「小学校社会科の発足」(『6・3 教室』第 3 号), 「児童観と社会科のあり方」(『児童心理』第 1 巻第 11 号), 「社会科と教育環境」(『教育社会』第 2 巻第 3 号)。
 - 23) 文部省『学習指導要領社会科編 I (試案)』(1947) 138 頁。
 - 24) 現場の「作業単元」への対応は, 現場教師からの手紙に対する次の重松の回答からうかがえる。「おたずねの作業単元の建て方について, 卑見をのべさせていただきます。おっしゃる通り, これはずいぶん方々で問題になっています。この間も K 先生から学習指導要領に作業単元の立て方について説明していないのはどうもよくないご注意ください。ただきました。」(重松鷹泰「作業単元の立て方について」(『社会科教育』第 4 号, 1947) 4 頁。)
 - 25) 長野師範学校女子部附属小学校, 前掲 8) 10 頁。
 - 26) 同上, 12 頁。
 - 27) この時期に長坂が発表した主な論考としては, 「作業単元の構成」(『社会科教育』第 14 号, 1948), 「小学校社会科学習指導要領補説について」(『社会科研究』第 1 巻第 2 号, 1948) をあげることができる。
 - 28) 長坂端午「作業単元の構成」(『社会科教育』第 14 号, 1948) 2 頁。
 - 29) 同上, 3 頁。
 - 30) 同上, 3, 4 頁。
 - 31) 長坂端午「小学校社会科学習指導要領補説について」(『社会科研究』第 1 巻第 2 号, 1948) 4 頁。
 - 32) 長坂端午, 前掲 28) 5 頁。
 - 33) 長野師範学校女子部附属小学校, 前掲 8) 30 頁。
 - 34) 松下義敏「総合授業について (二)」(『信濃教育』第 737 号, 1948) 13 頁。
 - 35) 同上, 14 頁。
 - 36) 同上, 13 頁。
 - 37) 長野男子附小における総合授業の伝統については, 東京高等師範学校附属小学校の主事佐藤保太郎も次のように評価している。「この計画はちょっとした思つきやデスクプランではなく, 既に八年の長い間の経験記録であることである。その根気強さと, しんしな教育態度に対して自ら尊敬の念がわくのである。」(佐藤保太郎『総合学習の指導計画』に対する意見 その一 佐藤保太郎』(『教材研究』第 3 巻第 4 号, 1948) 45 頁。)